

# 四季成り性イチゴ新品種“なつあかり” “デコルージュ”のランナー発生条件

東北農業研究センターでは“なつあかり”、“デコルージュ”の2つのイチゴの四季成り性の新品種を育成し、2007年8月に品種登録がなされました（図1）。

四季成り性品種は主に夏秋期のイチゴ生産に利用されていますが、当所が育成した2品種は果実品質が優れているため、各方面から生産拡大が期待されています。しかし、イチゴはランナー（匍匐枝）で増えるのですが、一般に四季成り性品種はランナーの発生が少なく、増殖が難しいという問題があります。そこで、ランナー発生を増やすための条件を明らかにしました。



図1：“なつあかり”（左）“デコルージュ”（右）の果実

## 《寒さに十分あてること》

イチゴは冬期に寒さに十分あたると、春から夏にランナーが発生します。そこで、ランナー発生に対する寒さの量と日長の影響を調べました。

それによると、両品種とも日長を16時間に延長した場合に、5℃以下の低温遭遇時間が1000時間を超えるとランナーが発生しました。しかし、自然日長条件では発生しませんでした。したがって、自然日長が12時間程度より短い場合には、電灯を点灯して日長を長くする必要がありますと思われる（図2）。

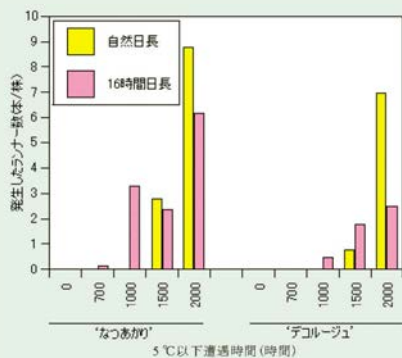


図2：低温遭遇時間および日長が“なつあかり”“デコルージュ”のランナー発生に及ぼす影響（屋外で所定の時間低温遭遇させ、その後温室に入れて生育させたので、それぞれの自然日長時間は低温遭遇時間により異なる。低温遭遇1000時間で日長は平均11時間、1500時間で平均12時間。16時間日長は電灯で延長）

夏秋どりイチゴ研究チーム

濱野 恵

HAMANO, Megumi

また、寒さに十分にあてた後、本来のランナー発生時期である春から夏に日長を変えて栽培すると、“なつあかり”では日長が長いほどランナーは多いのですが、“デコルージュ”では長すぎると逆に少なくなることが分かりました（図3）。

## 《寒さが足りない場合は冷蔵庫を利用》

冬期、屋外に苗を置いておくだけでは寒さが足りないことがあります。そこで苗を-1.5℃の冷蔵庫に入れて低温処理をしました。その結果、品種によって必要な冷蔵日数が異なりました。“デコルージュ”では30日間以上の処理で、“なつあかり”では60日間以上の処理でランナーが発生して、ともに90日間処理で最も多くのランナーが得られました（図4）。

これらの情報を利用して“なつあかり”と“デコルージュ”の苗が効率よく増殖され、栽培が拡大することを期待しています。

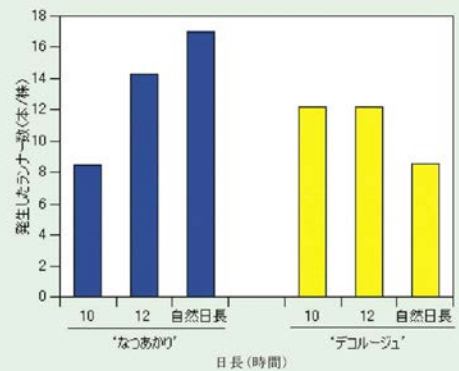


図3：異なる日長下での“なつあかり”“デコルージュ”のランナー発生（処理は5月中旬～9月中。自然日長は12～15時間）

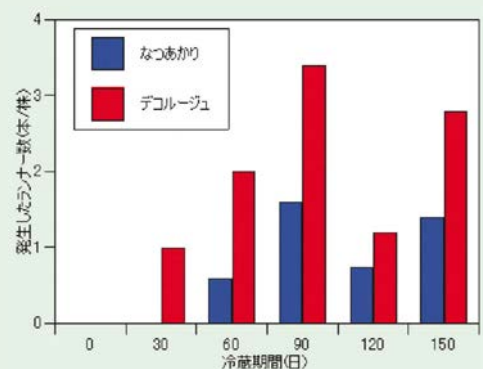


図4：冷蔵期間と“なつあかり”“デコルージュ”のランナー発生（冷蔵後、温室で16時間日長で栽培）